

石原千秋著

『反転する漱石』

藤森 清

本書によって、石原千秋の一九八〇年代から九〇年代にかけての夏目漱石に関する仕事をほぼ通読することができる。

八二年の『道草』論にはじまり、八五年の二つの『こゝろ』論を経て、八六年の『坊つちやん』『三四郎』論、八七年の『それから』論、八八年の『明暗』論と続いた一連の仕事が、漱石研究の領域に与えたインパクトの大ききさについては、ここに改めて繰り返すまでもない。社会学文脈の「交換」「贈与」や「家族語」(フロイト思想によって「家族」や自我について語ること)という枠組みで、漱石の諸テクストを分析したこれらの一連の仕事が、それ以後現在まで続く漱石研究の文脈をつくったといっても過言ではないだろう。

そしてまた、これらの漱石に関する一連の仕事は、漱石研究という領域を超えて、ひろく近代文学研究の領域全体に大きな影響力をもったものでもあった。多少の誤解を覚悟していえば、石原の仕事が八〇年代の文学研究の領域に対してもった意味は、テクスト論という用語に集約されるといえよう。石原の仕事は、八〇年代に「テクスト論」と、とりあえずは呼称された研究動向の成立と展開に密接に関与している。

ひとつには、本書にまとめられた仕事を、こうした研究動向の卓越した成果ということができようし、また同時に、テクスト論が原來的にもっていた社会化、歴史化の契機を展開し、現在の文学という領域を歴史化する研

究動向の一つの淵源ともなった仕事とみなすこともできる。八八年の『明暗』論(「修身の〈家〉」/記号の〈家〉)あたりを起点として、それ以後九〇年代にかけて「歴史」(「あとがき」)に重点を置いて書き継がれた諸論文に、八〇年代の石原の仕事がもともと持っていた社会化、歴史化の契機がより顕在的な形で示されている。

本書に収められた石原の仕事は、論文単位でひろく読まれ、すでに漱石研究史の上に確かな位置付けをもつものであり、石原もその点に配慮して、ほぼそのままの形で収めている。また、漱石研究という文脈についてはより適切な論者があるかと思われるので、この小文では、内容の紹介は省いて、本書の中心となる石原の八〇年代の仕事の方法論的な側面について、決して歴史的に総括するというのではなく、研究の現在に密接に関係する現在形の問題として検討してみよう。

八〇年代の石原の仕事は、かなり乱暴に整理すれば、言説分析の手段としての語り論、その分析結果を意味づける精神分析学の文脈での家族Ⅱ主体論と、社会学・文化人類学的

文脈の対他関係Ⅱ主体論の三つの要素から成り立っているといえよう。

まず、石原の語り論の特質を知るうえで興味深いのは、八二年の『道草』論(劇としての沈黙)前半、『道草』における健三の対他関係の構造(『日本近代文学』二十九)と、この論文の原初形とも呼ぶべき「叙述形態から見た『道草』の他者意識」(八〇年、『成城国文』四、本書未収録)だ。前者は、健三の対他意識を社会学、文化人類学的文脈の「交換」「贈与」などの概念で分析したよく知られた論文だが、後者は、おそらくその下敷きになった論文で、そこで石原は、『道草』本文全体を「叙述形態」(文の叙述内容と語り手の視点構造とを複合的にとらえるための仮説的な考え方)によって分類分けするという膨大な作業を行っている。この作業に、後にわれわれを感心させ続けることになる漱石の小説テクストの周到な読解の基盤をみつめることができるわけだが、注意しておきたいのは、そもそも石原の研究が、可能なかぎり恣意的な解釈性を排除した「客観的」な、物語言説の形態分析からはじまっていた点だ。

この物語言説の形態分析から派生した大事な論点は、三人称の語り手の偏差や、その意味作用における機能の分析という領域を確かなものにしたことだ。この点は、「劇としての沈黙」からは落とされてしまったが、八五年の二つの『こゝろ』論、「眼差しとしての他者」と『こゝろ』のオイディプスや、八六年の「鏡の中の『三四郎』で展開された。遣書や手鏡の書き手としての先生や青年の言説の分析をばねにして、三人称の語りの実態を「実体化した語り手」として抽出し、その機能を「語り(手)が、表現そのものに組み込まれた、読む行為自体を対象化する力(作用)である以上、たとえコード化の機能が低くとも、語りはずべての文にまつわりついていると考えるべきであろう」と説明している。

しかし、同時に八五年からの仕事には、読書行為論を包含した語り論の文脈が加わり、それが前景化している。一般に、この時期の論文は、精神分析学の文脈を援用し、漱石のテクストをファミリー・ロマンスとして分析した鮮やかな手際に注目が集まりがちだが、

より根本的なのは物語言説の形態分析という当初のスタイルが後退し、現象学的な読書行為論を基盤とする読みの脱構築の作業が前景化した点だ。石原のいう「反転」である。

石原によれば、「反転」とは、「一度構築させたテクストとの関係を自ら反転(脱構築)させるプロセス」のことであり、そこには「読者が内なる他者と出会う契機が含まれている」という点で価値があるとみなされる。いうまでもなく、この「反転」という方法の基盤にあるのは、読書行為を「読者の自己組織化のプロセス」であると同時に「自己を編成しているディスクールを対象化するプロセス」(あとがき)とみなす、いわば「テクストの現象学」あるいは「読書行為の現象学」である。

最近、金子明雄はある書評で、八〇年代にテクスト論と呼ばれたものを総括して「テクストの現象学」あるいは「読書行為の現象学」と命名し、そこに通底する原理をつぎのように説明している。「書き手を中心にするにせよ、語り手を問題にするにせよ、言語表現との関わりによる言語主体の自己形成とい

う問題を、そのまま言語表現を軸に読み手、あるいは聞き手という受容サイドに反転させらる。〔『国文学研究』一二五〕

この意味で、語の正確な意味で、八五年から八八年の石原の仕事、テクスト論と呼ぶことができる。石原の場合、分析方法としての現象学的読書行為論が、解釈枠としての精神分析学と、自己形成、つまり「成長」・

「成熟」物語という点で整合性をもつため、その分析・読解は大変鮮やかなものになった。(ある箇所では、「オイディプス・コンプレックス」が「反転する語りの『起源』」だとされている。)漱石が一貫してそれに向けて書いた、明治後期から大正中中期にかけての都市中産階級の精神空間という、歴史的個別性の枠内でいえば、石原は、おそらく正統的で最終的な漱石テクスト読解者だといっているだろうと、個人的には考えている。

しかし、八〇年代半ばまで最後の文学主義として残っていた、おそらくは形成期の中産階級の精神空間とも通底する、現象学的な読書行為が成立する読書空間と精神分析的な精神空間は、とりわけ非政治的で非歴史的な

言説空間でもある。石原の読解が示すのが漱石の諸テクストの可能性の限界だとしたら、あとはそれを歴史化するしかない。

もちろん、石原はこのことに早くから気付いていて、それはたとえば七七年の「反」家族小説としての『それから』のなかの、テクスト論の記述にはそぐわないような問題意識に明らかだ。「読者は、近代の自我の覚醒の美名のもとに、本来働きであるはずの自我を実体化し、代助の自我の統一がどのような感性や論理の枠組によって組織化された結果なのかを問うことを忘れてきた。」

この感性や論理の歴史的構築を問う姿勢は、八八年の「修身の〈家〉／記号の〈家〉」において、「家族語」の歴史性を問題化するために、大正教養主義の「修身」「修養」の歴史的な文脈が導入されるにいたって顕在的になる。そして、このとき、同時に現象学的な読書行為論のスタンスもとられなくなる。

ごく簡略で、図式化したものではあるが、このように八〇年代の石原の仕事をふりかえると、われわれの多くもまた、この道を歩いてきたのだという気がする。というか、正確

には、石原を先導者の一人として、テクスト論を通過することによって、最後の文学主義としての現象学的思考とのあいだの紐帯を断ち、文学の歴史化という場所へ連れだされたのだ。

文学の歴史化はけっして容易な課題ではない。歴史が直接的に現前しているかのように語る安易な歴史化の危険を回避し、言説表象の内部から言説表象の歴史性を問うことによつてのみ可能となる文学の歴史化のために、本書にまとめられた石原の仕事は参照し続けられるだろう。

最後に、個人的な感想を述べさせてもらおうなら、石原の研究の始発点にあった物語言説の形態分析の作業の可能性の全てが本書に実現されているわけではない点において、今後の石原の展開を大変楽しみにしている。

(ふじもり・きよし 金城学院大学助教授)
 (一九九七年十一月刊 青土社 二八〇〇 冊)